
フェアライズ

KAITO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェアライズ

【Nコード】
N2762Z

【作者名】
KAITO

【あらすじ】
戦争が終わり3年：平和な街に住む青年アルフレットは街の自警団であるガーディアンを立ち上げていた。平和な街で暗躍する傭兵部隊スレイブ：解散したはずのスレイブが何故！過酷な運命を背負う青年が命の大切さを知る物語

十プロローグ十

十プロローグ十

「……………」

ある冬の寒い夜、爆炎が照らすその要塞に佇む青年。

髪は短く薄い茶で

頭に黒いスカーフを巻いている

黒いジャージ上下に鉄板を加工した胸当てを纏い、その腕には肘ま
である籠手、ももには鉄を縫い合わせたものをあてがっていた。

その前に怯える一人の兵士

銃弾の跳ね返りから顔を守るフルヘルメットをかぶり、肩掛けのガ
ードプレートをしていた

「た…助けてくれ…。」

悲痛の叫びをあげる兵士に

彼は容赦なく手に持った刃を突き立てる。

体を濡らすかえり血が彼の体温を奪っていく。

辺りには人の死体と銃や戦車の残骸がごろごろと転がり、むせ返る
ほどの死臭と火薬の臭いで充満していた。

ここはネイスール独立国の要塞ユグドラス

ネイスールの要となる要塞で、独立国最大の広さを誇っている。

燃える戦車から吹き出す爆煙が空を明るく照らしている。

ユグドラス要塞上部の監視台で一人の兵士が白い布を掲げる、それ
は文字通り白旗で彼等は降伏の意思を見せたのだ。

だが彼に喜びはなくただ悔恨の念にさいなまれていた。

「もっと早く降伏していればこんなことにはならなかったのに。」

吸う息がひどく冷たい。

戦争の悲惨さが身に染みる中ひたすらに振られる白旗をただ見つめていた……………。

十 第1話〈再返〉 十

十 第1話《再返》 十

ヘレニツク共和国

エアツイア州カルスト

街の中心に時計台が建ち、西洋風の町並みが広がる。

「ふあゝあ…。」

隠しもせず大きなあくびをしたあと

「今日もいい天気だなー。」

とのんきな一言。

平和そのものの綺麗な街に彼はいた。

髪は肩まで伸びつんつんしている、服装はフードのついた半袖の上着の下にタンクトップを着ていて、膝までのぶかぶかジーンズにスニーカーを履いている。

彼の名前はアルフレット・フラッシュユ。

アルフはどうせ何も起こらない平和な街のパトロールをしていた。

いつもとは違うルート行ってみつか、とその日は普段あまり警備しない道を通った。

カチャッ

「お前は少し知りすぎた…。」

と人気のない路地裏に2人の人影。

首からカメラを下げ無精髭のはえた記者風の男、黒い上下のジャージにスカーフという見たことのある服に顔の大半を隠す怪しい仮面の男。

仮面の男は記者風の男の心臓に銃を突き付けて、引き金に手をかけ、今にも撃ちそうだった。

あれは…！

と思いついたふしのあるアルフは

間一髪のところでもその場に走り込み記者風の男を突き飛ばし銃弾から助けた。

「何だ！？」

予想外の事態にうろたえる仮面の男。

しかしその男は以外にも冷静に銃口を記者風の男に向け直そうとした。

しかしそれは阻まれた。

アルフが手刀によって銃を弾き飛ばしたからである。

「なっ…！」

間髪入れずに拳を握り、仮面の男を殴りつけ狭い路地裏の壁に押さえ込む！

「その格好…お前スレイブの人間か？」

そう問い掛けるアルフ。

スレイブとは以前あった組織でどの国にも属さず条件と報酬次第でどの戦争にも加担するいわば傭兵部隊。

「ぐっ…。」

腕を押さえ付けられる痛みには呻く仮面の男。

「スレイブは解散したはずだ…何故その制服を着ている？」

「そんなこと知るかよ！」

「これは少し調べる必要があるそうだな…。」と一人つぶやきそこから離れようとすると

ガシッ

何者かに腕を掴まれる。

!?

振り返るとさっきの記者風の男。

「いやあく助かりましたよ！」

とその顔には笑みがあつた。

えっ…？

何でこいつこんなに動じてないんだ？さっきまで銃突き付けられてたのに…。

「私はカルスト新聞の記者でネムルグと申します。よろしければあなたを取材させていただきませんか？」

こいつ……あほだ…

ダメだ付き合つてられねえ

と呆れるアルフ。

「ああ…そういうのパス！それじゃあな。」
と即答しそそくさとその場を離れる。

「ガーン…まあそう言わないで下さいよ。」
とネムルグは必死で追いかける。

その路地の建物の屋上

佇むさつきとは違う仮面をつけた女

その女は屋上から一部始終を見守っていた

「アルフ……。」「
と呟く……。」

そこで

ネムルグを引き離そうと奮闘していたアルフは視線の気配に気づき
振り返ると

そこにはもう女の姿はなかった

「……………気のせいかな？」

と確かに気配のした屋上を見上げるアルフ

「どうしたんです？というか私の話し聞いてます？」「
と纏わり付くネムルグ。

はあ……助けなきゃよかったかな……？

と心で思い自嘲の笑みを浮かべる。

どこかで感じたことのある気配を背中に残しながら……。

十 第2話〈驚愕〉 十

十 第2話〈驚愕〉 十

同カルスト夕刻

パトロールの時間を終えたアルフは人で賑わうフリーマーケットに
来ていた。

スタスタ歩くアルフにカメラを持ちついてくる男。

そうナムルグはまだ取材を諦めてなかった。

あいつマジかよ

すぐ諦めるだろうって正直ナメてた…

まさかパトロールについてくるなんて

はあ…

と憂鬱でいると、

「ようアルフ！どうした浮かない顔して。」

とそこには見慣れた男が立っていた

背はアルフより高く

長さはアルフと同じくらいだか癖のついた髪で色は金。

白いポロシャツ一枚にあしもとがぶかぶかのこげ茶のズボンを履い
ている。

彼はウゝアンス・ネア・エクレール

町の自警団であるガーディアンに入る仲間であるアルフの昔馴染みの友
だ。

「ようウゝアンスそっちは終わったか？」

と挨拶ついでに問い掛ける
ガーディアンのパトロールは区域と時間ごとに区切られていて、出
来る限り色々な道を警備出来るように配置されている。

「おお！バツチリだ！そつちは？何か変わったことはあったか？」
と問い掛け返すウゝアンス

アルフの顔が曇る

「やっぱり何かあったのか…どうした？話してみるよ。」
と優しく聞きなおすウゝアンス

「ああ…実は…。」
とアルフがパトロール中であつた事を出来るだけ詳しく話した。
するとウゝアンスは

「まさかここでスレイブの名を聞くとはな…間違いないのか？」
ともう一度問い掛けたが

「いや…お前がスレイブと何かを間違えるわけないか…。」と自戒
した。

それを聞いて

「まあな…。」

ふつと自嘲の笑みを浮かべたアルフに

「それじゃあ誰かが解散をリーダー変更と偽って組織を存続させた
つていうことか…？」

と聞いた話を簡単にまとめるウゝアンス

「ああ…多分な…。」

そう顔を伏せるアルフ

「でも分からないな…。」

という突然の疑問に

何がだ？とアルフは聞く

「一体誰だ？あんなことがあったっていうのに組織を存続させたんだろ？リーダーまでかってでて……。」

確かにとアルフが続ける

「そこなんだ……あそこから組織を続けたい奴なんて……。」
そんな奴思いつかない……思いつくはずがない
と空を仰ぐアルフ

そこに

「あのお……あなた方さつきからやたらとスレイブに詳しくそうですね……
ど一体何者ですかね？」
とネムルグが入ってくる

「……こいつ誰だ？」

とウゝアンスが当然の質問をすると

「こいつがスレイブに襲われてた奴だ。」

と説明する

ああと納得と呆れをみせるそして

「あんたさ……スレイブには首突っ込まない方がいいぞ……というか知りすぎたってスレイブの何を知ってしまったんだ？」

と忠告するウゝアンス
すると

「え？スレイブの今のアジトですけど？」

しれっと言ったネムルグの言葉に

2人は顔を見合わせた。

日の陰る中

一旦自分の部屋に帰ったアルフは、ダンスに入っている懐かしいも

のを見つめていた。

昔使っていた箆手と剣そしてもも当てである。

定期的に手入れをしているがやはり大きな傷の残るそれらをいたわり見詰め

『それじゃあ今夜7時頃第四倉庫に来て下さい！』
というネムルグの言葉を思い出す。

なんでも今夜7時頃からスレイブの話し合いがあるらしく、そこにはリーダーもくるだろうとの事だった。

なんか胡散臭せえんだよな

と心配になりながらもスレイブの事が気に掛かるアルフは行くことを承諾した。

箆手を付け、もも当てをあてがい

「さあ…行くか？」

と自分に言い聞かせ腰に剣を差し扉を開けた…。

夜7時

カルスト第四倉庫群

その一角に3人は集まった。

ウァンスは肩当てに胸当て、そして大形の剣を背中に背負っていた。
た。

ネムルグは何故か大きなフライパンを持っていて

「いやいや弾よけです！弾よけ！」
と意味の分からないテンションでワクワクとしていた。

倉庫の影から物々しい見張りを確認すると
あそこだなー
とその周辺に待機した。

「こういう空気久しぶりだな。」
アルフは実際少し楽しんでいた
今の街でこういうスリルは中々味わえない。

「そうだな。」
と同意するウ、アンス
奥ではネムルグが
いい写真とれそうだとソワソワしていた。

「どうやって進入する？」
至って冷静に問い掛けるウ、アンスに

「もちろん強行突破！」
と自信満々にアルフが言うと
「アホか！」
と流石のウ、アンスも声を荒げる

すると
「おい！そこに誰がいるのか！」
見張りに見つけた！

「まったく！しょうがねえなウ、アンスは。」

と至って楽しそうに物陰から飛び出し

2人の見張りの内一人を走り込みからの蹴りで気絶させた！

なんだ！？

とそこに目をとられたもう一人を

ウァンスが手刀で気絶させる

「お前なあ〜」

少しは考えて…と叱ろうとするウァンスに

「まあこうなっちまったもんは仕方ないな

」

とやはり楽しそうにアルフが言う

「お前が言うな！ ったくしょうがねえ…」

「ぶち抜くか！」

と2人は拳を構え扉を蹴り破った！！

十 第3話〈戦闘〉 十

十 第3話《戦闘》 十

ガタン！

2人は勢いよく扉を蹴り破った！

倉庫内は思いの外広く

真ん中に机が置かれ

倉庫と言うよりは

ひとつの部屋のようだった

真ん中の机には3人の仮面の男と1人の仮面の女が座っていてそれぞれ

顔半分を隠す仮面

顔全体を隠す仮面

顔半分と口周りを隠す仮面

サングラスのように目だけを隠す仮面をしていた。

その中で1番背が低く若い

サングラスのような仮面を付けた男が

「何事ですか！」

と予想外の事態にうろたえた。

しかし

予想外だったのはその男だけでなくアルフもだった。

その仮面の男達は
顔を隠しているものの
以前のスレイブの幹部で

その雰囲気から
アルフは即座にそう悟った。

「おい…お前ら…何で…。」
とアルフが言うと静かな空気が流れる…

「まさか…あなたはアルフレットさんですか？」
とサングラスのような仮面の男が聞く

「ああ…お前…グレンだな…？」
とアルフは言う
サングラスのような仮面の男の名は
グレン・コークス

「そんで他のはミッド、エルダー、リードだな。」
とウゝァンスが補足する。
顔半分を隠しているのがミッド・クラスター
顔半分と口周りを隠しているのは4人中唯一の女性でエルダー・マ
ーリアス
顔全体を隠しているのがリード・クラスターである

「お前ら…。」
とアルフの言葉が止まる
「ぶっ…ははは…ははははははは。」
とアルフは笑い出す
それに続きウゝァンスも

はははと笑い出した

二人の笑った原因は…

「あははは…お前から何でそんな仮面付けてんだよ！あーはははは。」
と爆笑を続けるアルフ

「くくく…やめてやれよ！あいつらだって少しは考えて仮面付けてんだ…笑っちゃ失礼だろ！…くはは。」
と笑いをこらえるウゝアンス

「な！なんだと！」

と恥ずかしくなり声を荒げるグレン

「ふむ…あいつら何も変わつとらんようだな」と一番貫禄のあるリードが言う

「仮面はいい！それよりお前から何がわかった？」
とエルダーが二人に問い掛ける。

するとアルフ達が話し出す前に
ミッドは嬉しそうに

「お前から戻るつもりで来たのか？」
と言うと。

「んなわけねえだろ。お前らを止めに来たんだよ。」
と力強く言うアルフ。

そうか…と続け

「だが我らは止まる事はできない…ステルスとの約束だ。」と断言するリード

「アルフ！お話し合いに来たのか？違うだろ！」とアルフを戒めるウゝアンス

「だがまだ話し合えるチャンスがある！」とアルフは反論する

「そうでもないぞ…」と指を指すウゝアンス
指の先では

グレン達が武器を構えていた。

「お前ら！あんなことがあったのに何で！」とアルフは必死になる。

「リードさんが言ったでしょう！ステルスさんとの約束です。僕達はステルスさんを裏切ることには出来ない！」
とグレンは食いつくさらに

「だから…だから…ちからづくでもついてきてもらいます！」
と持っているアサルトライフルで撃ってきた！

サラリと避けるアルフとウゝアンス

「ちっ…こいつら本気だ…とりあえず黙らすぞ！」というウゝアンスの提案に

ああ…とアルフは答え

2人は攻撃体制に入る

それと同時にエルダー、ミッドも持っている銃で2人を狙い撃ち始める！

アルフは銃弾の雨を避けながら

エルダーとミッドに接近し

エルダーの顎に向かって掌底を放ち

ミッドの腹部に蹴りを入れ
2人を気絶させる。

ウ、アンスは

倉庫内の障害物を使って

上手く弾をよけグレンに近づき

みぞおちに拳を入れ気絶させた。

そこで動かなかつたりリードは

腰に差してあつた剣を抜き

アルフに斬りかかった！

それを腕につけた籠手でいなし

体術で足をからめとり倒して押さえ込んだ

俯せに押さえ込まれたリードは

「やはりお前らは…相も変わらず強いな…昔も勝った事はなかつた。

」と昔を思いだす。

「リード……………ここまで攻め込まれて幹部を4人も倒されたんだ…
もうあきらめろ。」とウ、アンスは組織をやめることを促す。しか
し、

「まだ…諦めてはおらんよ…！」

と指をパチンツと鳴らすと

数十人のスレイブの兵士が銃を構えて
倉庫を占拠した。

十第4話《乱戦》 十

十第4話《乱戦》 十

余りの事態に

それまで端で写真を撮っていたネムルグも

ひゃー！と

あわてて物陰に姿を隠す。

「おいおい…用意周到なこつたな…。」

と周りを見渡すアルフ

「ふう…スレイブを存続させたいアホがこんなにいるとはな
と呆れるウゝアンス

「ふん…詰まれたのはお前らのほうだったな！いつまでもルーキー
気分を捨てないからこういうことになる！」

と兵士が来た途端に威勢のよくなるリードに

「へえ…押さえ込まれてくせに口が達者だね…。それに俺がル
ーキー？はっ！俺が他の勢力から何て呼ばれてたか知ってるか…？」
とアルフは睨みをきかし…

これはやばいな…と

ウゝアンスはアルフの雰囲気の変化を感じ取りアルフを止めようと
おいアルフ！おち…まで言ったところで

ドサドサと先陣をきって倉庫に入っていた兵士が数人倒れる。

リードの上にはすでにアルフの姿はなかった。

「…つけ…る訳ないですよね。」

ときつき言いかけた続きを独り言でつぶやき

銃弾の通らない壁にエルダーとミッドを隠す。

その時アルフは倒れた敵の真ん中でほう…と息ついていた。

そして

「何が起きた！おい！こいつらを撃て！」とリードがアルフ達を指差す。

は…はい！と状況のよく理解出来てない兵士達は銃を斉射し始める

アルフは目にも留まらぬ速さで

兵士達の後ろに周り込むと

数人の兵士を打撃で倒し

銃弾の飛んでこないうちに

違うところに周り込み

数人倒すと何度も繰り返し

ウァンスは

大きな剣を盾にしながら

兵士に近寄り

数人の兵士を拳で薙ぎ倒す。

二人は圧倒的だった

銃弾をすべて避け次々と兵士を倒されていく姿に

物陰に隠れ跳弾をフライパンで避けながら写真を撮り続けるネムルグは

「これは…本物に会っちゃったみたい。」
と一人つぶやく。

その光景をまざまざと見せられたリードは「な…なんだと…。」と

動揺を隠せない。

そしてついに

最後の兵士をみぞおちへの肘打で倒し

その場に立っているのは

アルフとウゝアンスの2人だけになった！

すると

ウゝアンスはリードの側に行き

「そういえば…さっきの話しだけだな…」

と二つ名の話しを掘り返す。

「光の如き速さで戦場を駆け抜け抜け兵士を確実に仕留めることから

あいつの戦場での二つ名は

閃光のレイド（奇襲者）だ！」

「閃光の…レイド…！」

と余りに少ない時間で数十人の兵士を倒された事に開いた口が塞がらないリード

数十人の兵士を相手にして

傷ひとつつかないその体を

跳弾によって穴の開いた天井からの

月光が照らし

まさに光のようだった。

十 第5話〈再会〉 十

十 第5話《再会》 十

「流石ね！」

不意に入口から聞こえたその声に
アルフ達はその方向を見た。

そこには今まで見たどの仮面とも違う仮面をつけた女が立っていた。

この感じどっかで…
と

その仮面の女からどこか懐かしい気配を感じ

そういや！

とアルフが思い出したのは
今日ネムルグを助けた時に
誰かからの視線を感じた時のことだった。

思い出したそのあとも

すこし考えてみたが

思い当たる節は出てこず

「あなた…俺が記者を助けたとき見てた女だな？お前がステルスか
？」

と女に直接聞くと

「その通り…私が現スレイブのリーダーステルス・マーシーだ。」
と仮面の女は言い放った。

その名に心当たりのないアルフとウ、アンスは顔を見合わせる

「やっぱり幹部レベルの相手じゃ全然物足りないかしら？閃光のレイド！」

「そんなのは物足りるとか物足りないとかじゃねーだろ…それよりお前どういっつもりでスレイブを存続させた！」
と怒りを見せるアルフ

「それはあなたに会うためよ！また戻ってスレイブを続けましょう！」
と言うステルスに

「そいつはお断りだ！あんなことがあったのに組織を続けてなんになる！また利用されるだけだ！」
とアルフは悔やむ気持ちを抑えずに言う

その時横にきたウ、アンスが
「お前…ただ傭兵を続けたいのか殺し屋として生きたいのかどっちだ！騙されていたとしても俺達は多くの命を奪ってしまった…その責任を負わなきゃいけないんだ！」と普段冷静なウ、アンスまでもが声を荒げる。

「どういう方針かなんてどうでもいいのよ！アルフが戻ってスレイブが続けばそれでいい！」
とステルスも声を上げ始める

「そこまでして何故アルフを………！」
そこでウ、アンスは口を閉じた

あることに気が付いたのだ

まさか…あいつは…

あいつはステルス・マーシーなんかじゃない！あいつは…。

と一人思うウゝアンス

「何でもいいさ！そんなに俺が欲しいならちからづくで奪ってみせろよ！それがお前らの方針だろ？」

とまどろっこしい話し合いに

耐え切れなくなったアルフは言う

「……………いいわ…今の私の力…見せてあげる！」と腰にあった半月状のダガーナイフを二本取り出しアルフに襲い掛かった！

ステルスのダガーから繰り出される素早い攻撃を全て紙一重で避けるアルフ

その連撃を避ける中

この戦術…どこかで

とアルフはどこか懐かしさのようなものを感じ取った

そして頭の中に検索をかける

以前のスレイブいた

ダガーを使い素早い攻撃を仕掛けてくる

そして

距離をとると！

とアルフは急なバックステップで相手と距離をとるすると

アルフの思った通り

女性が使う用の小さなハンドガンで

両足を狙ってきた

バク転で銃弾をかわし

「お前！リウ、イアか！？」

と精一杯の声で銃を構えるステルスに問い掛ける。

するとステルスは銃を下ろし

ダガーを捨て

していた仮面を取り外した…。

十第6話〈過力〉十

十第6話《過力》十

仮面の下からは

髪は伸び大人っぽくなったものの
リウゝアアの面影が見えた。

「リウゝアア…な…んで…。」

と絶望に近い感覚を必死に堪えるアルフ

まさか…まさかりウゝアアが…

スレイブのリーダーだったなんて…

ウゝアアス以外には予想外の事態に騒然とする倉庫内

物陰に隠れていたネムルグは

ひょいと出てきて

「どういふことですか？」

と質問をする

ウゝアアスは

はあ…こつなつちまつたら…

と諦め気を使ってネムルグを連れて倉庫を出た

沈黙が広がる倉庫内

「この3年間ずっとか…？」

とアルフが沈黙を破り質問する

「ええ：貴方がスレイブを解散させたときその場にいなかった人を召集して私がリーダーを継いだという事で組織を続けたの。そしてばれないように仮面で顔を隠した。」

「何でそんなこと：辛かっただろ：？」

とリウ、イアの精神的な苦痛がどれほどだったか考える

「さっきも言ったでしょ：貴方に：アルフに会いたかった：どうしても納得出来なかったの：だから！」

とぼろぼろと涙を流すリウ、イア

こうなったのは

俺のせいか：とアルフは深く後悔した。

その頃倉庫の外では

「マジですか！？二人共スレイブのメンバーだったんですか！」
とネムルグは叫んでいた。

「ああ：しかもアルフはリーダー、俺とリウ、イアは副リーダーだった。」

とウ、アンス懐かしそうに語る。

「あのアルフって人めっちゃ強いですもんね！まさかリーダーだとは：ん？あれ？じゃあ組織を解散させたっていうのはアルフさんが自らの組織を解散させたってことですか？何ですか？」
と懐からメモ帳とペンを取り出しメモをしだすネムルグ

「解散させた理由：ね：まああれだ色々あったんだ。」
と話しをはぐらかすウ、アンス

「え〜気になりますよ!」

とネムルグは何かを閃き

「そういえば〜幹部さん達と戦ってる時あんなことがあったのにか、誰かに騙されて利用されたみたいなこと言っていましたよね〜! あれはどういうことですか?」

と質問する

めざとい奴だな…聞いてやがったのか…

とウゝアンスは心の中で思う

「あ〜…まあいつの時代も強い力を持つのはそれ相応のリスクを伴うって事だ。」

とまた話しをはぐらかし

「はい質問終わりだ! もうお前は帰れ!」

とウゝアンス

「え〜〜! まだ全然質問が!」

とごねるネムルグ

すると突然何かを思い出すウゝアンス

「そうだネムルグ! そのカメラかっこいいなちよつと見せてくれよ。」

「

「でしょ〜! このカメラお気に入りなんですよ!」

と急に機嫌が直り

カメラを渡す

ガチャ!

カメラを渡されたウゝアンスはカメラの中から無理矢理フィルムを剥がし取り出した。

「うえあ!？」

と驚きのあまり意味不明の声をあげるネムルグ

「すまん、この事は俺らだけの秘密にしてくれ。」
とさらっと言っつてフィルムを手でグチャッとやった

「ま…マジですか！せつかく撮った写真が！はあ…」
とその場にガクリと倒れ込む

「まあこれに懲りたらもうスレイブの事には首を突っ込むな。お前の命が危ないからな」
と言っつと散歩してくるわ
とその場を離れるウゝァンス

それを物欲しそうにみるネムルグはしばらくそこに倒れていた。

そして倉庫内

「あの時はああするのが1番だと思っただ…確かに俺らはたくさん人を殺したが俺らの仲間もたくさん死んだ…そんな状態で組織を続けても皆が崩れていくだけだから。」
と苦渋を浮かべるアルフ

「組織の解散はしょうがないことだと思っ…でも何で私は置いてかれたの？」

と涙を隠しながら声を絞りだすリウゝィア。

「俺が側にいたらリウゝィアを傷つけるだけだと思っただ…。」
と精一杯の答えを出すアルフ

実際アルフの強すぎる力は様々な組織にとって魅力的だった。
そのためスレイブが解散したあとどこから聞き付けたのかいくつもの

の組織がアルフを勧誘にきた。

もちろんそのすべてを断って今のガーディアンを作った訳だが
もしリウ、`イアと行動を共にしていて

人質などとられていたらどうなっていたか分からなかった。リウ
、`イアはそういう存在だった。

「私は！私は…アルフが思う程弱くない…。」
とまた涙を見せるリウ、`イア

「そんなことは知ってる…知ってるけどすべてに勝てる奴なんてい
ないんだ…もし俺と一緒にいて…リウ、`イアがそのせいで傷ついた
としたら俺は…自分を許せない…！」
と拳を強く握るアルフ

アルフには分かっていた

これの今のこの状況も自分が招いた事だとアルフが前からいなくな
った…そのせいでリウ、`イアはアルフに会いたいが為にスレイブを
存続させた。

利用されるだけだとその道は辛いだけと分かっていたのに。それで
もリウ、`イアは組織に身を投じた。

そしてアルフはここである決断をしたのだった。

十 第7話〈決断〉 十

十 第7話《決断》 十

「リウ、イア：ガーディアンにくるか？」「アルフのした決断とは側にも傷つける遠ざけても知らないところで傷つくそんなリウ、イアを側に置いてかつ守り続けるというものだった。

「！！」

と声にならない叫びをあげるリウ、イアはさらに涙を流しアルフに抱きつく

単純に嬉しかったのだ

今まで拒絶されたと思いついていたリウ、イアにとって他の誰でもないアルフに受け入れてもらえたことが。

「……………いく……………」

とアルフの胸の中で嗚咽を必死に抑えつつ声を絞りだした。

ふう…やれやれ

と散歩と称し扉のところで話しを聞いていたウ、アンスは一人つぶやく。

あいつら昔っからまどろっこしいんだよなお互い意識しまくってるくせにつかず離れずで…

と一人懐かしさに浸っていると

扉の周辺に気配を感じたアルフはウ、アンスに気づき

「おい！ウ、アンス！なに立ち聞きしてやがる！」

とすこし怒鳴った

やべ…ばれた

とウゝアンスは扉から姿を現し

「いや…ははは別に立ち聞きしてた訳じゃないよ散歩してたらまたま通りかつただけさ。」

と精一杯の言い訳をする

そして涙のあらかたおさまったりリウゝイアはアルフから離れ

「ウゝアンス…！」と赤らめた頬を膨らませた。

「まったく…罰としてこいつらの手当て1番多くやれ。」
とアルフはウゝアンスに罰をかす

「うわっほとんどお前がやったんだろっが！」と反論するウゝアンスだが

なにか言ったか？とアルフに睨まれ

渋々手当てを始めるウゝアンス

そんな二人の懐かしい様に

リウゝイアは三年ぶりの笑顔を見せた。

結局ウゝアンスは

数十人の兵士のほとんどを手当てし

しばらくすると

「リウゝイア…ばれてしまったのか？」

とリードが起き上がり

いてて

と他の幹部達も起き上がった。

そしてエルダーが

「その調子だとなんだか丸く収まったみたいね」

とリウ`ィアの久々の笑顔を見て微笑んだ。

よかったなリウ`ィアちゃん

とミッド

それにしてもお二方とも

全くなまっていなかったですねとグレン

全員起き上がったところで

アルフはあることを思いだしは

「そついやお前らがリウ`ィアとしてた約束って何だったんだ？」

と問い掛ける

すると

「ああ…あれですか」

とグレンがいうと

リウ`ィアが

「あれはアルフが戻ってくるまでこの5人で頑張ろうねっていう約束。」

とアルフの問いに答え

「辛くても支え合えるようになっていうリウ`ィアの心遣いよね」

とエルダーが補足した

「そつか…みんなほんとにすまなかった…そんでリウ`ィアのこと
ありがとう…これからは俺がリウ`ィアを守るからみんなはそれぞ
れの道を進んでくれ！」

と皆にいうと

ヒューヒューとミッドが茶化し

「あの時のことでお前さんをうらんでる奴なんざ一人も居はせんよ
…」
とリードがフォローした

「そうか…ありがとう。」
とアルフは皆に深く頭を下げた

そしてリウゝィアは
その場にいたスレイブ兵士達も含めて召集をかけ
「皆…今まで一緒に戦ってくれてありがとう…今日でホントにスレ
イブは解散します！皆それぞれ苦しみを持つてるだろうけど負けな
いで、仮面を外して堂々と生きて行って下さい。」

こうして

カルスト第四倉庫群での

一夜の戦いは幕を閉じた。

空には戦いの後とは思えない程
澄んだ月と綺麗な星空が広がっていた。

十 第8話〈胎動〉 十

十 第8話〈胎動〉 十

「なあ…ありやあどう見ても万引きだよな…。」
と物陰に隠れたアルフが尋ねる

あの日

解散したスレイブのメンバーの中から、またアルフと戦いたいと志願した者が後を絶たなく、そのほとんどがガーディアンに入団した。その為人数が爆発的に増えたガーディアンにはシフトが作られ、より厳格にパトロール出来るようになっていた。

この日はアルフ、リウ、エア、ウ、アンスの3人がたまたま同じシフトに入って警備を行っていて。

パトロールでたまたま通り掛かった雑貨店で、店主が若い女性と話しているのをいいことに、店先でバックの中に次々と商品を入れていくおじさんを見つけたのだ。

「まあそうだろうな…。」
と同意するウ、アンス

「いくら店主が女の人に気がいってるからってやり過ぎね…。」
と呆れを見せるリウ、エア

お！動くぞ

とアルフは物陰から
急に飛び出した

すると当然おじさんは走って逃げる

「おいアルフ！あいつ逃げるぞ！」

とウゝアンスが言うと

「いやいや逃がしてんだよ。少しくらい手応えないとつまんねーじやん！」

とアルフは胸をはる！

「たかが万引きのおじさんに手応え期待すんな！それに少し速いだけの奴ならお前すぐ追いついちゃうだろ。」

と呆れるウゝアンス

そんなやりとりをしている間に万引きのおじさんはどんどん見えなくなっていく。

「さあて行くか！」

と言うと同時に目にも留まらぬ速さで走り去るアルフ。

お前の足にゃ誰も勝てねーよ…

とウゝアンスは心の中で思う

アルフは

万引きおじさんとの距離を自慢の脚力でみるみる縮めて行く

そして

おじさんの肩に手が届いた瞬間、横を通り掛かった眼鏡の男

その男に見覚えのあるアルフはその男を凝視する、その時間がスロウのように感じる。

眼鏡の男はアルフに向かい

「おや、お久しぶりですね、アルフレットさん。」
と囁いた。

急に肩を掴まれた、万引きおじさんは体勢を崩し、その場に倒れ込む。

アルフは咄嗟に受け身を取り体勢を立て直す。

そして眼鏡の男の方を見るが
そこにはもう誰もいなかった。

あいつは…。

と拳を握りしめるアルフ。

「おい、アルフ大丈夫か！」

と店主と話していた女性を連れているウゝアンス達が追いついた。

ウゝアンスの呼び掛けに応じず一点を見つめ続けるアルフ。

「アルフ？」

とリウゝィアが心配そうに聞く

その声でアルフはふと我に帰った。

「ん？どうした？」

と状況のつかめないアルフ。

「どうしたはお前だ。」

何かあったのか？

とウゝアンスは心配そうにアルフの見ていた場所を見る。

「いや…別に…」

とアルフは言葉を濁し

「うし！万引き犯捕まえたし警備部のところに連れて行くつぜ！つかその人は？」

と無理矢理にもとのテンションを取り戻すアルフ。

「ああ…この女は万引き犯とグルだったんだ。」

とウゝアンスは

離しなよ！と腕を振るう女を前に突き出す。

「早く連れて行きましょう！パトロールの続きをしないと。」

と言うりウゝィアの提案で3人はガーディアン警備部へと向かった。

アルフは犯人達を連れているウゝアンスの横をついて行く。

先程通り掛かった眼鏡の男が自分の予想と違って欲しいと切に願いながら。

十 第9話へ『記憶』開始』 開始』 十

十 第9話へ『記憶』開始』 十

その日部屋に帰ったアルフは
そのままベットに身をあずけた。

確かに見覚えのあるあの眼鏡の男が気掛かりで
るくに食事もできなかつたせい
か
その日はいつもより疲れていた。

あいつ、どう見ても…
でも何でこんな街に…。
などと色々な思考を巡らせているうちに
うつらうつらと睡魔が襲ってきて
アルフは眠りに落ちた。

「おーい！あのー、聞いてますか？」
髪は今より短く
まだ幼さが残るリウゝィアの顔が
目の前でちらちらする。

「ああ…聞こえてるぞ。」
とアルフは自分の意志とは関係なく返事をする。

あれ？俺…？ああ…夢か。
リウゝィアの服装からしてスレイブの頃だから3年以上前か…懐か
しいな
とアルフは夢に意識を向ける。

そこはネイスール独立国の国境付近にあるスレイブアジトのアルフの部屋でその部屋にリウゝィアが訪れてきていた。

「じゃあ返事くらいして下さいよ。」

と頬を膨らますリウゝィア

「すまない…で、何だっけ？」

されていた質問を聞き直す。

「だから、補給部隊の人達が帰ってきてなくて…何かあったのかなって。」

怪訝な面持ちのリウゝィア

「どこかで道草食ってるだけだろ、心配しすぎだよ。」
とアルフは軽くあしらう。

「そうかな？」

とリウゝィアは

いつになく心配そうな顔で部屋を出ていく

国境まで食糧を買いに行っただけだ…大丈夫

アルフは自分にそう言い聞かせた。

そこで意識が飛び

ふっと場面が変わる

そこは同アジトの作戦会議室

目の前ではリードら幹部4人とリウゝィアが議論を交わしていた。

「もう4日目だぞ！何者かに拉致されたに違いない！」
怒鳴るリード

「まだ分かんないだろ〜もしかしたら組織が嫌になって抜けただけかもしんないぜ〜。」

と反論するミッドに

「貴様！仲間を裏切り者と言っつか！」

更にすごい剣幕でミッドに食ってかかる

「落ち着けよリード〜俺は可能性の話しをしたんだ。少なくともあいつらにはその傾向があったぜ〜なあアルフ。」

とアルフに同意を求めるミッド

「ああ…あいつらがこの組織への不審をまったく持っていなかったかと聞かれると何とも言えない。」

とミッドの意見に同意する

ほらな〜とミッドは調子にのる。

だが

「それでもあいつらは裏切るような奴らじゃない。俺はそう信じた
い」

アルフは暑い眼差しで語る。

「貴方についてきてよかったわ。」

とエルダーが言っつと

「はい！流石はアルフさんです！」

とグレンが深く同意する。

「それじゃあアルフ！すぐに搜索部隊をだしましょうっ?」
切実に提案するリウゝィア

しかしアルフはその提案を受け入れない

「それはだめだ…もしほんとに拉致されたなら被害者を増やすだけ…これからここにいる6人を3つの部隊に分けて捜索を行う。」

と別に案をだすアルフ

そのアルフの提案に反論する者はなく

すぐに行動に出た

アルフのした振り分けは

?アジトの北部、補給部隊が買い出しに行った国境の街ノイスへ行く部隊

?アジトの北西、国境沿いにある独立国軍の駐屯地へ行く部隊

?そしてアジトがあるこの街ハイドでもしもの襲撃に備え残る部隊

の3つで

力を出来るだけ均等に分けるが

?の駐屯地行きは戦闘になる可能性が高いため力の比重を大きく設定して

まず?は聞き込みでの捜索になるため女性のエルダー、口の達者な
ミッド

?には動きが素早く偵察と隠密行動の得意なアルフとグレン

?はスタミナがあり防衛戦の得意なリードと射撃の得意なリウ、イ
アである

「よし、全員反論はないな…。この作戦はこれ以降、補給部隊捜索
作戦というスレイブの正規のミッションだ!明朝6時作戦開始だ全

員気を引き締めていけ！」

アルフが5人に向けて言い放つ

「はい！」

話しを聞いていた5人はその身を奮い立たせるような返事をし
会議は解散した。

ああ…そんなこともあったな…

確かこのあと…

と現実のアルフが思っていると

場面はその日の夜へと飛ぶ

その時部屋の窓際で

椅子に座って月をみていたアルフは

ミッションへと逸る気持ちを必死に押さえていた。

コンコンッ

そんなアルフの部屋に木製の扉をノックする軽い音が響く。

「空いてるぞ。」

とノックに対してアルフが答えると

「リウゝィアです…ちょっと今いいですか？」

という小さい声が返ってきた。

断る理由も特にないので

どうぞ

と部屋に通すアルフ。

すると扉が開いて

その小柄な少女が入ってきた。

「どうした？眠れないのか？」

部下の身を案じるアルフ

「いえ…明日の作戦のことです。」

と顔を曇らせるリウ、エア

「街での待機、不満か？」

リウ、エアの気持ちを察したのかそう質問するアルフ

「いえ不満とかそういうのじゃなくて、ただじっとしていられなくて…私も連れて行ってくれませんか？」

と勇気を振り絞って願いを言うリウ、エア

アルフには気持ちが痛いほど分かった

自分も月を見て気を落ち着けているくらいなのだ。

だが、

「気持ちは分かるけどな…自分の持ち場を守れ。今回のミッションでいらない役割なんかない。その中でもリウ、エアとリードは俺達が補給部隊を見つたときに、帰る場所を守る重要な役目なんだ。だから、俺達の居場所をしっかりと守ってくれ。」

とアルフはリウ、エアを説得する

ただじっとしてられない

それ以外に理由の見つからないリウ、エアには反論があるはずもなくただ黙るばかりだった

静寂の訪れる室内

「ふ…物は言いようだよな…。」

と気まずい雰囲気には堪えられなくなったアルフは自嘲してその場を和ませようとする

「俺は…ただ大切な人に傷ついて欲しくないんだと思う…きっとそれだけなんだ。」
と作り笑いを浮かべるアルフ。

そんなアルフの思いを察したのか

「分かりました。街の警護は任せて下さい！私も大切な人が帰ってくるこの街を守りきってみせます！」

とだけ言うと

それじゃあ

とそそくさと部屋を出て行ってしまった。

どさくさに紛れて何てことを…

本人に向けて“大切な人”と言ってしまった事を後になって赤面するアルフ

作戦に少しでも疲れを残さない為に

そのままベットに横たわると

アルフは深い眠りについた。

早朝5時30分

再び会議室に集まった

6人は

目的地や移動手段、

弾薬や武器など細かい

準備をすませていた。

「よし、全員準備はいいな…。」

アルフの号令に全員が頷く

時報が6時を知らせる

「これより補給部隊開始作戦を発令する！ミッションスタートだ！」

十第10話へ『記憶』作戦』十

十第10話へ『記憶』作戦』十

アルフの号令のあと
振り分け通りに行動しだした6人

まず移動開始班の四人は
アジトにある地下駐車場に行き
国境の街ノイスへ行くエルダー、ミッドの2人は軽トラックに
駐屯地へ行くアルフ、グレンは隠密行動となるため無音走行が可能
なバイクに
それぞれ乗り込み
アジトを出発した。

その後ハイド防衛班のリウ、エア、リードはスレイブのメンバーを
集めて
街の巡回を指示したあと
リウ、エアは望遠台で街周囲の監視
リードは巡回に混ざり

本格的にミッションは開始された。

アルフ達が
アジトを出発して30分

駐屯地へと急ぐアルフとグレンだったが
アルフが突然グレンに停止の合図を送った

アルフからの突然の停止の合図に戸惑いながらも停車するグレン

「どうしたんですか？」

と停止の理由を聞くグレン

「実は、俺にはもう一つだけ補給部隊の居場所に心当たりがあるんだが…。」

と話しを切り出すアルフ

「そうだったんですか！？ではなぜ作戦会議の時に言わなかったんですか！」

とアルフを攻め立てる

「すまない…あの時は思いつかなかった。だがその場所にも可能性はある、だからここで一人づつに別れよう、お前はそのまま駐屯地へ向かってくれ。俺は…」

「ちよつと待つて下さい！軍の駐屯地ですよ？僕一人でなんて無理です！それにそこまで可能性があるなら僕も一緒に行きます！」

「グレン！お前ならやれる。それにもしこつちが空振りだったらすぐに駐屯地に向かう！だから一人で行ってくれないか？」

と真剣な眼差しでグレンを見つめるアルフ

そんなアルフに感化されたグレンは

「やってみます…！」

と答え

2人はここで別れることになった

一人無音バイクを走らせるアルフ
その時ポケットから
紙切れが落ちる

その内容は

書状

私はネイスール独立国軍大佐
カワード・ブレイスンです。
僭越ながら先日
貴方がたの部下達を保護させていただきました。
折居ってお話がありますので
軍の駐屯地南のパート森林まで
ご足願えますか。
出来れば一人で。
早めに来られた方が得策かと思われ
ます。
それでは。

というものだった。

アルフは最初から補給部隊がどこに
さらわれたかを知っていたのだ

これは1日前

アルフの部屋に投げ込まれたもので
この書状により補給部隊の居場所が分かった為、
怪しまれないよう
に作戦会議を開き
その身一つで補給部隊を助けに向かった。

パート森林に着いたアルフは

バイクを止め

迷わず森林の中に入って行った

森林の中は鬱蒼とした外部とは打って変わって整備されていて人の気配がした。

整備された道を辿っていくと

森の開けた場所に出た

そこは銃を構えた数百の兵士が周りをとり囲んでいて

その中心では軍服を着ていて黒の長髪に眼鏡をした男がレジヤー用の椅子に座っていて

更にその後ろの

犯罪者などを護送する為に使う大型のトラックの中に補給部隊のメンツが入れられていた。

アルフがその眼鏡の男に近づいて行くと

広場に入ってきた場所に兵士がつき

アルフは広場ごと円状に取り囲まれた。

そして話しを切り出す

眼鏡の男

「ごきげんよう！アルフレット君！君の噂は兼ね兼ね聞いていますよ。私の名前はカワード・ブレイスン、書状を送らせて頂いたものです。」

と懇切丁寧に自己紹介するカワード

「ああ…知ってるさ。お前の望みは叶えたんだ、早く仲間を解放しろ。」

苛立ちをみせるアルフ

「おやおや、そんなに怒らないで下さい。私はただ交渉をしようというだけです。」

「何が交渉だ！こういうのは恐喝って言うんだよ！一人で来いって
いうあんたの願いを聞いてやったんだ！まず人質を解放して退席さ
せろ！」

「そうですね。おい！人質を解放して“檻”の外に逃がせ！」
急に声色を変えたカワードは部下にそう指示するとアルフに向き直
る。

車から降りてアルフの方へ向かう補給部隊の5人。

するとすれ違い様にその中の一人が

「随分とゆっくりだったな…リーダー、危うく死ぬところだったよ。」

と皮肉を投げかける。

癖のついた短髪に金の髪

ウ、アンズだった。

十 第11話へ『記憶』陰謀 十

十 第11話へ『記憶』陰謀 十

「俺達が帰って来なくなってから5日間も放置とは、呑気なもんだな。」

更に皮肉を続けるウゝアンス

「救出が遅れてしまつてすまない…。お前らは先にアジトへ帰つてくれ。」

「5日間も監禁されてた人間がここから徒歩でか？」

アルフに食いつくウゝアンス

他の補給部隊は

「リーダーは俺らを助けてくれたんだ！早く行くぞ！」

とウゝアンスを急かすが

「うるせえ！そんなに行きたいなら先に行け！」

と一蹴する

「森林の道を辿つた先にバイクが置いてある。無理すれば5人くらい乗れるはずだ。」

何とか仲間を帰そうとするアルフだが

「いや、俺は残らせてもらつ…。お前に貸しをつくるのはごめんだ。」

「ふざけてるのか！今の状況をみる！貸し借りがどうとか言ってる場合か！」

ウゝアンスの言い分に流石に怒鳴るアルフ

その言い合いに堪えられなくなった他の補給部隊はアルフの来た道から森を出て行ってしまった。

「お前最悪だよ。いつも汚れ仕事は自分で片付けようとしやがって。お前このあとこいつらと何か交渉するつもりだろ！」

「……………」
何も答えられないアルフ

「俺はお前がやってることをずっと見てたんだ。いつも俺らを守るために無理な交渉に応じて汚れ仕事をやってきた！気に食わないんだよそういうの！自分一人で戦ってるつもりか？見くびるなよ！お前はリーダーだが俺らの仲間だ！そんな仲間が一人苦しんでるなんて！一緒に戦わせろよ！何のための仲間だ！」

いつも冷静（というよりもこの時のウゝアンスは冷徹に近かったが）なウゝアンスがここまで心をあらわにしたことに驚くアルフ

知られていたのか…とんだ茶番だったな。
と心で自嘲するアルフ

「すまない…。」
とだけいうと
鳩尾に衝撃を与えて
ウゝアンスを気絶させた。

「さあ、交渉を始めようか。俺らがここから無事に帰る為にはどうしたらいい？」

「そうですね。ある戦線に傭兵として参加して欲しいですね。」
傭兵部隊に傭兵を頼むという思いの外当たり前前の要求に若干の安心

を覚えるアルフだったが人質を使ってまで聞かせたい要求などがろくなものである筈はない

「その戦線は？」

「ええ、別に対したものでじゃ無いですけどね……………」

「だからどこだ？」

「ユグドラス防衛戦に来てくれませんか？」

「なっ！？お前本気か！」

動揺するアルフ

それもその筈

そこは独立国最大の防御要塞でそこには独立国の元首の住む屋敷もある為

並の要塞の防衛戦とは比べものにならないほど過酷で危険な戦場だ。それにこれまでのように

行動不能だけですむほど生易しいものばかりではなく兵士数がとにかく多いため確実に命のやり取りになる。

アルフにとって一番出てほしくない名前だった。

「本気ですよ。貴方が一人居てくれればそれだけで一区画くらい余裕で守れそうですからね。元肆騎士の一人アルフレット・ブレスクさん。」

「何故その名を知っている？」

「有名な話じゃないですか。騎士団長の息子、ブレスク家の長男。

ああ…今はフラッシュと名乗っているんですけどっけ？」

「白々しい奴だな。」

「ふっ…よく言われますよ。」

「それで？受けていただけますか？」

この状態で拒否権なんか無いだろ
と思っただが

首を切り落とした返り血を浴びて笑い狂う余りに残忍なその姿に兵士達はただ黙り、次が自分で無いことを祈るばかりだった。

十第12話〈慟哭〉十（前書き）

初心者の綴ったつまらない作品をここまで読んでくれてありがとうございます。KAITOです。挨拶が遅れてすみません、出来れば「つまらない」「もう少しこうした方がいい」など何でもいいので感想を書いてくれるととても嬉しく思います。それでは12話をお楽しみ下さい。

十第12話〈慟哭〉十

十第12話〈慟哭〉十

ピピピッ！ピピピッ！

目覚まし時計のアラーム音で急に意識を現実に戻されたアルフ
汗だくの体がやけに怠く感じられる
アラーム音を消した後

はあ…嫌な夢をみたな…

と一人ため息をつきながら

寝汗を流すために

シャワー室に向かう

シャワーを浴びながらも

夢で見た過去の出来事が頭から離れない。

あの喋り方…

間違いなくカワードだった…。

でもあいつ、この街に何の用があるって言うんだ。

その不安を掻き立てるように遠くの方で救急車のサイレンが鳴り響
いていた。

カワードらしき眼鏡の人物を見かけてから一週間が過ぎたその日、
ガーディアンメンバーで緊急会議を行っていた。

会議の内容は

ここ最近、カルストの住人が5人行方不明になっているというもので

元スレイブの幹部4人を含めほぼ全員がその会議に集まっていた。

アルフはこの事件にある不安を抱えていた

一週間前カワードを見かけたこと、夢で見た補給部隊5人の誘拐。どう思考を繰り返しても最悪の場合しか想像出来ないアルフ

カワード…今回もお前なのか…！

心の中の怒りを隠し会議を進める

「最後に議題の誘拐事件について何か情報がある奴は拳手して提供してくれ。」

拳がらない…か…。

「よし分かった。ただ街を出たまま帰って来ていないだけかもしれないからな…これまで以上に警備を強化してもう犠牲の出ないように心掛けてくれ！それじゃあ解散。」

会議を終えたガーディアンのメンバーは次々と退出して行く。しかし幹部4人とリウゝィア、ウゝァンスは退出しなかった。

「なあアルフ…お前この間…何を見たんだ？」

ウゝァンスが唐突にそう質問する。

「……………カワード・ブレイスン。」

！！！！

騒然とする6人

「多分だ…あれは多分カワードだった…。」

「やっぱりあいつか…。この誘拐事件を聞いたときあいつの顔が浮かんだんだ、1番聞きたくなかった名前だな。」

確かに…と皆が同意する。

「とにかく…これからの対策は…」

とアルフが言いかけたところで

急に警報が鳴り響き

数人の兵士が入ってきて

「アルフさん！北方から独立国軍の一個連隊が接近中です！」

「連隊だつて!?!」

連隊とは中佐又は大佐が率いれる最大の兵士集で1以上の大隊乃至は複数の中隊からなっておりその最大兵力は5000。

「はい！機甲戦車12、榴弾砲特科兵約100、対戦車砲特科兵約100、機械科歩兵約300、狙撃普通科歩兵約500の連隊です。」

「何だと…機甲戦車や特科まで…この街を地図から消す気か!?!」

焦燥の隠せないアルフ

「連隊は大佐が率いれる最大の兵力だ…そしてこのタイミング、ほぼ間違いなくカワード・ブレイスン！」

ウゝアンスがいうと

アルフは窓を開き、“淡い光”を放ちながら外に飛び出した。

「あの馬鹿フィアスを！あれ程医者に止められてただろうが！」

「追いましょうウゝアンス！」

「ああ！」

とりウゝィアとウゝアンスも窓から飛び出した。

その頃遙か北方、機甲戦車の長距離砲の届くぎりぎりの範囲約40kmの位置で、前に連隊を従える眼鏡の男は

「さあ、戦争を始めましょうか！目標カルスト時計台！機甲戦車、砲撃開始！」

会議を行っていた家を飛び出したアルフは“淡い光”を放ちながら、本来ならば数十分かかる時計台広場まで数分で来ていた。

早くしないと大変な事に…。
と急ぎ広場を通り過ぎようとしたその時

ドオオン！

耳を劈く爆発音とともに

ガラガラと崩れ去る時計台…。

平和な街での平和だった街での突然の出来事に悲鳴をあげ逃げ惑う人々。

目の前で時計台を何らかの大砲で狙撃される事態に、一瞬の放心状態の後

「カルストが…、俺達の…街が…う…うおおおお！！！！」

何故奪う

何故こうなる

何故俺の目の前では失われるものがこんなに多いんだ！

何故、何故、何故

アルフは哭いた。

それとほぼ同時に

体から“大量の光が吹き出し”顔の左側に十字架様の紋章が現れ、そしてその場から消え去った。

十 第13話〈憤怒〉 十（前書き）

おはようございます

KAITOです。

読んで下さっている皆さん

本当にありがとうございます。

この小説は僕が初めて書いた小説なので言葉の表現や世界観などがうまく言い表せなくて色々至らない点多いと思いますが暖かく見守ってくれば幸いです。

こんなことを言うのはおこがましいですが感想、レビュー何でも良いのでください。

頑張っ完成させたいと思いますので

それではまた。

十 第13話〈憤怒〉 十

十 第13話《憤怒》 十

アルフを追っている最中に、時計台が砲撃される所を目撃しその場で啞然となる2人。

「まさか…時計台を砲撃するとはな…和平条約をぶっ壊すつもりか！」

「カワード・ブレイスンよ！こんな無茶苦茶なことが出来るのは彼しかないわ！」

2人は怒りを隠せない

その時、寒気がするような力の波動を感じる2人。

「これは…カワードの身を心配した方が良さそうだな…。」

「今のはアルフの！そんなこと言ってる場合じゃないわ！早くアルフを止めないと！」

「ああ…分かってるよ。」

おそらくもうアルフのフィアスは暴走してる。刻印が出てなければいいんだが…。

思い当たる節があるウゝァンスは最悪を想像する。

「とにかく急ごう。リウゝィア！出来るだけしっかり俺に掴まれ！

アルフ程じゃないが音速くらいなら出せるかもしれない！」

「わ…分かったわ！」

言われるがままウゝァンスの背中にしがみつくリウゝィア

「ちょ…ちよつとこの格好恥ずかしい…。」

「少し我慢しろ！行くぞ！」

言うなり体全体から静電気を発しはじめるウゝァンス。

そしてその静電気を足に集める。

「^{インパルス}衝撃電流！！」

掛け声と同時に足の裏から何十万ボルトの電気を放ち音速で空に跳ね上がるウゝアンス。

後ろで失神寸前のリウゝイアが悲鳴をあげている、それどこれじゃないのかももう格好は気にしてなさそうだ。

音速により繋がって見える周りの風景、それを横目に見ながらアルフのことを考えるウゝアンス

あいつの速度ならもうカワードの近くまで行っている筈だ…アルフ早まるな！お前はもう人を殺しちゃだめだ！

近くの崖上で、移動する敵本陣を見下ろすアルフ。

先ほど同様顔の左側に十字架様の模様があり、“体から染み出る光”。

その光が段々と強くなりまたその場から消えたかと思えば敵本陣前に突然姿をみせた！

突然アルフの姿を確認したカワードは

「本陣停止！他の部隊は前進を続ける！」
と指示を送りそれを復唱する参謀。

「やはり来てくれましたかアルフレット！ウゝアンスネア達の姿は見えませんがまさかお一人で来たのですか？」

「……………」
余裕をみせるカワードを無言で睨みつけるアルフ。

「そうですね…今更会話など無駄ですね…あなたの力見せて頂きま

すよ！歩兵200機械科100前へ！あいつをなぶれ！プライドを
少しづつ傷つけて生きる気力を削ぎ…そして私の前に差し出せえ！
あははは！あはははは！

あつという間に300の兵士に囲まれるアルフ。

そして兵士達が一齐に攻撃を開始しようとしたその時

ブルガシオン
「浄化！」

掛け声と共に“強大な光”が広がり兵士達を包み込んだ！

「素晴らしい！素晴らしいですよアルフレット！これが王たる“光
の力”！貴方は私が見込んだ何倍もの力を有していますよ！」

光が収まると兵士達は散り散りに吹き飛び皆気絶していた。

「カワード…何故街を攻撃した？」

「何故？もちろん貴方の力を引き出す為に決まっているじゃないで
すか。」

「そんなことの為にカルストの時計台を撃ち抜いたのか？」

「もちろんですよ。貴方の必要性が再確認出来たのですから相応な
犠牲でしょう。」

あまりにも非人道的な発言に拳を握るアルフ

その時背後から銃声が聞こえ、ぎりぎりまで反応したアルフの顔を銃
弾が掠める。

！？

その光景に驚くアルフ

先ほど気絶させたばかりの兵士が立ち上がり始めていた。

機械科兵がライフルや機銃を構え狙う中

数人の兵士が銃剣を構えアルフに走り寄る。

アルフはまた“淡い光”を放ち
先頭にいた兵士を顔面への飛び膝で気絶させるとその後ろについて
いた数人を振り手で一掃。

その後狙い撃ちされた銃弾を
軽々と避け

機械科兵の背後に周り込み意識を奪う。

「あはは！素晴らしいですよ！私も少し燃えて来ましたよ！あはは
はは！」

カワードはその言葉と同時に両手を広げ

「大翼ゼファー！！」

と叫んだ。

すると周囲の風がカワードに纏わり付き背中に大きな翼の様な形で
具現化した。

それを横目で見ていたアルフは

あれは：風の：あいつも領力者だったのか…。

と考えながら

降りしきる銃弾の雨を避け続け

一人また一人と戦闘不能者を増やしていく

“大翼”を広げるカワード

今度は指の先に“風”を集め

「斬風エアレイド！」

“具現化された風の刃”がアルフ目掛け打ち出される。

それを確認したアルフは

“放っていた光”を腰に差してある剣に集めて一気に抜刀する。

「光刃ソニック！」

アルフの抜いた剣からも光の刃が打ち出され、カワードの放ってい

た刃と衝突し、カワードの放った風の刃は砕け辺りに飛散する。飛散した風の刃が体に食い込み、のたうちまわる兵士達。

残った光の刃を“ 気流を操り” 躲すカワード。

カワードは腰に差した軍刀を抜き、アルフに対峙する。

「インパルス 衝撃電流！」

「キヤー！もう無理！死ぬ〜！」

あまりのスピードと高さに涙を見せながらじたばたと暴れるリウ、
イア

「落としやしねえから少し黙れ！そして暴れるな！」

「だって怖い！怖い怖い〜！」

あゝ…フィアスの制御に集中出来ない…

こいつ高所恐怖症かよ…やかましい…。

そんなことを考えながら

少し低空を飛ぶウ、アンスだった。

今にも踏み出しそうな空気…。

剣を抜き対峙する2人

その背後で撃ち抜かれた時計台の脆くなった部分がかがらと崩れていった。

十第14話〈衝突〉 十

十第14話〈衝突〉 十

「おいおい…これは。」

首元にファアの付いた銀色のコートを来た40歳程の男は、戦車によつて撃ち抜かれ見事に崩れている時計台を見上げて呟いた。

「それにこの気配…あのバカ息子絶対暴走してるな…こりゃあ何か対処しないとあいつ死ぬな。」

不吉な事を一人呟く男は静かにその場を去って行った。

ガキンツッ！

金属同士の弾き合う音が辺りに響き渡る。

先にカワードの懐に入り斬撃をいれるアルフ。

「いいのですか！そんなに悠長に構えては私の連隊がカルストに着いて殺戮を始めてしまえますよお！」

「黙れ！」

カワードの皮肉への怒りに、力の限り剣を振るうアルフ、だがその刃がカワードを捉える事はない。

「どうしたんですかぁ！怒りに身を任せすぎて動きが単調ですよ！」

カワードは両手を前に突き出し、その手に風を集める
「暴風！」
ブラスト

「ぐはっ！」

急に大砲のように発射された風を受け10mくらい吹き飛ばすアルフ、空中で体制を整え綺麗に着地する。

そして、間髪入れずにカワードに切り掛かる。

それを軍刀で綺麗に受け止め、そこから一步距離をとり斬撃を返す。アルフは下がった直後に切り掛かる。

同じタイミングで繰り出された斬撃は空中で弾き合う。

そんな刃の打ち合いを重ねる2人

「ラジエーション
光速。」

体の発光が強まり一瞬で後ろに回り込むアルフ

反応の遅れたカワードは後ろから放ったアルフの斬撃を受けきれなくて、胸部の皮膚が服ごと裂けて血が吹き出る。

怯んだカワードの胸倉を掴んだアルフは、力任せに空中に放り投げ、体の浮いて身動きのとれないカワードをラジエーション光速を使った打撃で打ちのめし最後は地面に叩き衝ける！

「がはっ！」

悶絶するカワードの心臓を剣で一突しようとするアルフだが

「うおお〜！アルフ！！！」

辺りに静電気のような物が発生し

上から降ってきたそれは

アルフの顔面を力いっぱい殴りつける！

突然の出来事で受け身の遅れたアルフは強かに体を打つ。

「いってえな！何しやがるウゝアンス！」

「何しやがるじゃねえ！お前今何しようとしてた！」

カワードを殺そうとしたアルフを間一髪で止めたのはウゝアンスだった。

「何ってこいつを殺そうとしてたんだ！」

「ふざけるな！こいつを殺してどうする！動き出した軍が止まるのか！」

「止まらないさ！止まらないけど…許せないだろ！スレイブの解散だって今回のカルストだって！全部コイツのせいなんだ！」

「悔しい気持ちは分かる！けどお前だけは！俺達だけは人の命を奪うことを絶対にしちゃいけないだろ！それに今コイツを殺せば軍

は本格的に動き出す！そしたらヘレニツク共和国とネイスール独立国の間で戦争になる！また沢山の人の命が奪われる！それでいいのかアルフレット！！」

「だけど…俺は…！！俺は…！！」

「後ろを見るアルフ！」

振り向くと崩れかけた時計台がころうじて建っていた。

「あれは俺達の街だ！その街を護るお前が…その街の人々の命を護るお前が…命を奪っていいのかぁ！！」

「…っ！！」

声にならない嗚咽と共に涙を流すアルフ

悔しい…こんな奴に躍らされたことが…カルストを壊されたことが…何よりどうしたらいいかも思いつかなかった自分が悔しい！！

「何を言っているんですかぁ！殺しなさいよ！憎いでしょう！悔しいでしょう！さぁ！早く！私を殺しなさい！殺して憎しみを広げろ
おおー！」

狂気の叫びをあげるカワード

「お前…！！」

何かを言いかけたウゝアンスは、泣き止んだアルフに肩を叩かれる。そして通り過ぎようとしたアルフの腕をつかむウゝアンス。

「もう大丈夫だ…大丈夫。」

振り向いたアルフの顔は清々しく穏やかでもう殺意は持っていない様だった。

その顔を信じ手を離すウゝアンス。

アルフがカワードへと近づいていく

「アルフ！来ましたね！さぁその手に持った剣で私を殺しなさい！心臓がいいですか！首を跳ね飛ばしますか！それとも出来るだけ苦痛を与えて殺しますか！ははは！あはははは！」

「カワードオオー！！」

もの凄い形相とその声量に

「ひっ……！」

思わずびくりとなるカワード

「歯あ食いしばれえ……！」

アルフは一瞬発光したかと思うとカワードの顔に拳をめり込ませる！
そのあまりに強力なパンチに眼鏡は粉々に砕けカワードは吹っ飛び、
後ろに構えていた戦車隊の一台にボゴンツと体が食い込ませ気絶し
た。

「……………はあ……スツキリしたあ……！」

いつものアルフにふっと少しにやけるウゝアンス。

「あのウゝアンス……そろそろ降ろして……恥ずかしい……。」

後ろに背負われていたリウゝアが羞恥で泣きそうになっている。

悪い……とリウゝアを降ろすウゝアンス

「おお！リウゝアも来てたのか。悪いな、情けない姿見せちゃま
た……。」

「うっん……気持ちは分かるもん……それに最後のパンチかっこよかつ
たよ……！」

「はは……そうか。」

笑顔を見せるアルフ。

「よし！何かこっちは丸く収まったみたいだし……連隊止めに行きま
すか……！」

ウゝアンスの提案に反対する者はなく連隊の最先部に向かう3人

その頃カルストでは、リードら幹部達を筆頭に軍に対する防衛手段
を整えていた。

「あいつら大丈夫かしら？」

心配するエルダー

「大丈夫です！アルフさん達は絶対やつてくれますよ！」
グレンは自分にも言い聞かせるように周りを励ます。

「そんな事を心配してもしゃーないだろ！あいつらが支えたこの街はわしらが護るそれでいいだろ！」
周りを叱咤するリード。

独立軍連隊がカルストに迫る

「全員戦闘体制！！誰ひとり街に通すな！」

眼前まで近づく軍隊に、臨戦体制をとるガーディアン。

ドサツ！

進軍する軍隊の目の前に何かが降ってきた。

1番前にいた兵士が恐る恐る確認すると、自分達の上司で大佐の力ワードだった。

「大佐！どうしたんですか！大佐！」

体を揺さぶるが気絶していて目を覚まさない。

すると今度は、光に包まれた三人組がその場に現れた。

「まさか！お前達が大佐を！」

「ああ…そうだ…」

「この敵対行動の意味が分かっているのか！」

兵士と話しはじめるアルフ

「分かっているさ…だが…お前達はこいつに言われて無理矢理来させられたんじゃないのか？」

「……………」

「俺らはこれ以上の戦闘もその後起こるであろう戦争も望まない！お前達大切な人はいるか？」

「……………いる、妻と子供が。」

俺も恋人が、家族が、友人がと大切な人を上げていく兵士達。

「戦争が起これば、そういう人達の身が危険になるんだ。今なら間に合うから、そいつを連れて国へ帰れ！」

アルフの熱意と大切な人の存在で了解したのかその兵士はカワードを抱えると

「全軍停止！駐屯地まで引き返すぞ！」

隊長のようなその兵士がそう皆に告げると連隊は引き上げて行った。

「さあて！やることいっぱいあるしな！帰るかカルストへ！」

そう言って上げたアルフの手は弱く…弱く震えていた。

十第15話へ早練 十(前書き)

明けましておめでとございます

KAITOです！ちよつと年末から新年にかけて忙しくて投稿出来
ませんでした。

すみません

もしかしたらもう見てる人はいないかも知れませんがそれでも最後
まで書き切りたいと思いますのでもしまだ見てくれる人がいるなら
ちよくちよくチェックしてくれば幸いです。

それでは！

十 第15話〈早練〉 十

十 第15話〈早練〉 十

俺らが来たときよりはましだけど…これから大変だな。崩れかけた時計台を見てウゝアンスは思う。

「ただいま…！」

ウゝアンスに横脇に抱えられて街に戻ったアルフの第一声。

だが、

体から放たれる“淡い光”はおさまらず顔に現れた紋章も消えずに残っていた。

体中から出る冷や汗が止まらない。

次第に息があがりだし、素人が見ても分かる程に具合が悪くなっていった。

「おい…アルフ…？大丈夫か！」

「はあ…はあ…何だ…ろうな…ちょっと疲れ…。」
バタツ

その場に崩れるように倒れ込むアルフ

「アルフ！アルフ！どうしたの？アルフ！」

「おい！こいつ…まさかフィアスの影響で？」

「アルフー！！！」

リウゝィアの声を最後にアルフは意識を失った。

「ほら、これを持ちなさい。」

目の前に差し出される何らかの塊。

「これは何？」

恐る恐る伸ばされる幼い手

「これは剣だ。」

「剣って何？」

「それは相手に勝つためのモノだ。」

「勝つ？これでどうやって勝つの？」

「相手を殺すんだ…それが勝つって事だ。」

「クロス…？これで…？」

目の前の剣と呼ばれるモノの尖った部分を触ると指の皮膚が切れて赤い液体が漏れ出す。

「いたい…。」

「そうさ…その尖った部分で相手を殺すんだ。」

それがお前の生き方だ。

「俺の親父は…。」

と補給部隊拉致事件の後、ハイドの警備中、打ち解け始めたばかりのアルフとウゝアンスはこんな話しをした。

「俺の親父は…いくつだったかな…とにかく小さな俺に剣を持たせて相手を殺せと言った。」

と言つて手を握るアルフ

「……………」

ウゝアンスは黙って話しを聞く

「そんで…そのあとすぐに小さな剣を振る練習をさせられて…六歳になるときには本格的な戦闘訓練と殺人術を教えられた。」

「どうりで…。」

「…そんで三年前フィアスの概念を説明された…まあそれはあんまり覚えてないけど。」

「ファイアス…か…考えてみれば不思議な力だな…生命力の一部を何らかの特異な能力として発動させられる力なんて…」

「ああ…何だか親父もそんな事言ってたな…使いすぎると死ぬらしい。」

「そりゃあそうだろ生命力って事は生きるのに必要なエネルギーだろ？それを生きる事以外に使うんだから死んじまうさ。」

「じゃあそれ使うと負けるって事か。」

「え？」

「死んだら負けだし殺したら勝ちだ…だから負けるだろ？」

「まあそれだったら確かに…」

「俺にとつて正死と勝負はイコールだ。そついう生き方しか知らなかった。」

「知らなかったってことは…？」

「最近はおつと違うかな…相手を殺さなくても勝てる時ってあると思っんだ。」

「そいつは良い傾向だな。」

「ああ…そうかもしれないな。」

「アルフ！アルフ！」

意識の失ったアルフを部屋まで運んだものの容態のまったく変わらないアルフに焦りを見せるリウ、イアとウ、アンス。

「アルフ！ダメ…汗が止まらない！このままじゃアルフは…」

「くそ…いつたいどうすれば…」

ガチャ

不意に扉が開き誰かが入ってくる

その感じた事の無いほど強大な気配に近くに立てかけてあったアルフの剣を振り向きざまに突き付ける。

ぴたつと動きの止まる侵入者

「ちよつと邪魔するぜ。つか剣を下げな、気づいてる筈だぜどんな馬鹿でも分かるくらい強い気を送ってるからな。」

「くっ…。」

怯むウゝアンス

「お前じゃ勝てない…止めときな！とは言えコイツの友達にしちゃあいい殺気を放つ…好きだぜ…そういうの。」

とりあえず剣を下げるウゝアンス

「あんた何者だ？」

「あ？アルフのお父さんだ！」

「アルフのお父さ…ん？」

「ええ…！？」

リウゝィアとウゝアンスは余りの驚きに顔を見合わせて叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2762z/>

フェアライズ

2012年1月6日10時47分発行